

随筆

寶藏寺 さゆり 審査員

昨年応募の無かったジュニアの部では、今年、高校生1編の応募があった。随筆という若い世代には、なじみも無く難しく感じるのだろうが、今一番興味のあること、好きなこと、楽しいことについて、思いめぐらせて書いてみてはどうだろうか。中学生、小学生の応募を待っている。

一般の部には36編の応募があり、40編を越えた去年、一昨年から減りはしたものの、悲観はしない。在宅時間が増えたコロナ禍も、とうとう峠を越し、平時に戻りつつあるからかもしれないと合点する。例年どおり、三人の合議で選考に臨むのだが、それぞれの着眼点、自ずと基準が違うので、意見を主張し合い、他部門の審査終了を横目に、時間ギリギリまで三人が納得のいく着地点を模索しあう気満々だったが、以外にすんなり決まった。

題材もテーマも多彩であり、惜しくも選には漏れたが、燕の子育て観察記、音訳の体験談、コロナ禍の日常、歴史に埋もれかけた佐賀の偉人、懐かしい集落の風習について等、独自性があり、印象に残るものが多かった。

選考の方法は例年どおり、選者三人がおののべスト8編を挙げると、応募数36編中18編に絞られ、それら作品についてつぶさに検討する。三人共が選んだ作品は無かった。二人が共通して選んだのは9編だった。その9編の内から上位作品8編が選ばれることになるはずなのだが、今回は、違った。幾度か読みかえしているうちに不思議な魅力を湛えて滋味深い趣を行间に醸し出す作品があり、それを佳作の二つめとした。また、今年には佐賀県文学賞の60回記念特別賞が設

けられたことから、随筆部門では、珍しくも遺骨を題材に、社会的に関心の高い樹木葬、海洋散骨など、変わった。つがある葬儀のあり方にまで言及した作品を推した。

書くに足る題材はある、まつわるエピソードもあるので「起承転」までは書けるのだが、「結」でしどろもどろしたり、理屈を二転三転させたり、まとめるのに四苦八苦しているものも多くみうけられ残念だった。何故これを書こうと思ったのか、何を一番書きたかったのか、初心に素直に立ち返って、自分を内照するこ

とで自ずと納得のいく「結」が向こうからやってくるのではないだろうか。

それとは別に、「転」で、いきなり大きく飛躍して、とつちらかった印象を与えてしまう数編もあった。段落のつながりを意識して、思考を整理する必要があるだろう。

手書き原稿には、些細な勘違いのような漢字の誤字が多く、パソコン書きの原稿には、変換が容易だから、ひらがなが書きやすいところ難解な漢字を充てて、かえって読み難くしている文章が目立った。普段使わない漢字は避けた方が無難だろう。